



道徳ことはじめ

第21号

小金井市立東小学校 指導教諭 田上由紀子

今回のテーマは、「**児童の発言を楽しむ授業**」についてです。

道徳の授業のあとに聞く先生方（私も含めて）の声に次のようなものがよくあります。

「うまくいかなかったなあ。何で違う方に流れてしまうのかな。」

「いいところまで迫っていたのに、〇〇さんの発言で方向が変わってしまったなあ・・・。」

「あの発問でずれずれになってしまったなあ。」

「ありきたりの発言しか出なかったなあ・・・。」

等々、道徳の授業は、児童の発言によって大きく変わるので、教師が思ったようにいかないことが多々あります。そして、児童の発言が多岐にわたり、予想外の発言が出て、戸惑うこともしばしばあります。



道徳の授業がなかなかうまくいかなくて、どうすればいいのでしょうか？

私自身、「うまくいったな！」という授業は少なく、「うまくいかなかったなあ・・・。」と落ち込む授業の方が多いです。

うまくいかなかった授業の原因ベスト3

- | | |
|--------------------------------|--|
| 1. 教材研究が足りなかった | →児童の発言を分類したり、整理したり、つなげたりすることができない。 |
| 2. 児童の実態把握ができていない | →ねらいに対する児童の実態把握が不十分で、児童にとって難しかったり、体験や経験がなくて答えにくかったりする発問になっている。 |
| 3. 児童が考えたくるような発問でなかった。発問が難しかった | →より深く考えさせようという思いで、ちょっと踏み込んだ発問にしてはみたものの、児童にとっては分かりにくく、手が挙がらない。さらに、教師の方が話し過ぎてしまったり、補助発問をどんどんしたりして、一層混乱してしまう。 |
| ○発問の構成がよくなかった | →児童に問わなくてもいいことまで発問をし、児童が飽きてしまったり、時間が延びてしまったりする。 |

教材研究・児童の実態把握・発問構成がやはり大切になってきます。



児童の実態は、各クラスによって違います。教師用指導書どおりに授業をしてうまくいかないのは、指導例が学級の児童の実態に合っていないことが一番の原因としてあげられます。ねらいに関する児童の実態を把握して、授業者が明確な指導観をもって授業をすることが大切です。



児童が考えたくなるような発問というのは、どんな発問でしょうか？

まず、教材そのものです。その教材が児童の心を揺さぶるものであることが大前提となります。しかし、いつもそのような教材ばかりあるとは限りません。その教材の元になっている絵本などがあれば、原本にあたってみるのが一番です。その作者が一番伝えたかったものは何かをしっかりと教師がつかむことが大切です。教師が心を揺さぶられない教材は児童も揺さぶられません。なので、教材選びがとても重要です。

次に、その時間のねらいをよく吟味し、どの場面を中心的に児童に考えさせたいかを考え、中心となる発問（中心発問）を設定します。次に、中心発問場面で考えを深めるためにはどの場面を考えさせるのがいいかを考え、基本発問を（1～2問）設定します。

私がいつも失敗するのが、「考えさせなくては…」という思いが強くなりすぎて、難しい発問をしてしまい、児童が何を考えていいか分からなくなってしまうことです。そうすると、児童は自分の思いからではなく、「先生は一体私に何て答えてほしいのだろう？」と考えてしまいます。これでは本末転倒です。

前号で掲載しましたが、

発問はシンプルに、そしてシャープに！

児童の考えを引き出しながら、より深く考えさせていく。



ことが、とても大切になってきます。シンプルな発問をすると、児童は考えやすくなり、発言しやすくなります。

道徳の授業のときになかなか手が挙がらない児童は、「自分の思いを発表するのが恥ずかしい。」「自分の心をうまく言葉にできない。」「登場人物の気持ちを考えることが苦手。」「（教材にあるような）経験がない。」ことが多いです。そのような児童に最初から考えにくいことを考えさせても、「考えたい」という気持ちにはなれません。児童の発言をみんなで共有して、より深く考えていくことができれば、「児童自身が考えたくなる」気持ちにつながると考えています。

児童の発言に耳を傾ける。児童と一緒に教師も考えてみましょう！！



児童の発言には、「えっ！！そう考えるの？」とびっくりさせられることがしばしばあります。私はそこが道徳の授業の醍醐味だと思っています。予想もしていなかった発言に慌てることもありますが、児童の発言に感心したり、自分の視野が広がったり、多面的に考える糸口になったりします。児童の発言から、考えを深めさせていこうという意識でいると、児童の発言を聞くのが楽しくなってきます。ねらいに合った発言ばかり求めていると、つい違う発言が出ると、表情に出てしまい、児童が教師の意図する発言ばかり言おうとして、ありきたりの発言で終わってしまうことになります。

児童の発言をより深めていくことは簡単なことではありませんが、児童の発言に耳を傾け、児童と一緒に教師も考えていくような道徳の授業ができればいいなと考えています。

道徳ことはじめ

第22号

小金井市立東小学校 指導教諭 田上由紀子

今回のテーマ①は、「感動・畏敬の念」についてです。



感動・畏敬の念の授業は、とても難しくて、どうしたらよいのか…。

私も含めて、「感動・畏敬の念」の授業は、難しいと感じている先生方は多いのではないのでしょうか。

「感動」は、ネットで調べてみると、「強い感銘を受けて深く心を動かされること、人の心を動かして感情を催させること、他からの刺激に反応すること、作用を受けて動くこと、または動かされること」と出てきました。

「感動」は普段からよく使っているのに、イメージしやすいですが、「畏敬の念」はなかなか使うことや耳にすることがありません。

「畏敬の念」は、「崇高なもの、また偉大な人をおそれうやまう思い」という意味が載っていることが多く、大自然や神仏に対して使うことが多いようです。

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編では、下記のようにねらいを定めています。

〔第1学年及び第2学年〕

美しいものに触れ、すがすがしい心をもつこと。

〔第3学年及び第4学年〕

美しいものや気高いものに感動する心をもつこと。

〔第5学年及び第6学年〕

美しいものや気高いものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつこと。

ねらいだけでは、抽象的でどう指導をしてよいのか分かりにくいところがあります。それで、指導の要点から「指導に当たって」というところを抜粋してみました。

〔第1学年及び第2学年〕

児童が美しいものに触れて心が揺さぶられたときには、その思いを教師が大切にするとともに、児童の感動を他の児童にも共有できるように働きかけること

〔第3学年及び第4学年〕

児童が自然の美しさや人の心の気高さなどを感じ取る心をもっている自分に気付き、その心を大切にし、更に深めていこうとする気持ちを高めるようにすること

〔第5学年及び第6学年〕

文学作品、絵画や造形作品などの美術、壮大な音楽など美しいものとの関わりを通して、感動したり尊敬や畏敬の念を深めたりすることで、人間としての在り方をより深いところから見つめ直すこと

このように見てみると、自然や人の心などの美しいものに触れさせて、児童の心を揺さぶる必要があることが分かります。



教材の精選や教材提示が大切になってくるということになります。

自然の美しさや絵画などはより鮮明な写真などを選ぶことで、児童の感動は大きくなります。また、文学作品などは、ただ読むのではなく、読み方を工夫したり、BGMなどを使ったりすることでさらに児童の心に響くことにつながります。



感動・畏敬の念の教材は、児童の実生活とはかけ離れていて、自己の振り返りをどうしたらよいか悩んでしまいます。

私もいつもそこで悩みます。せっかく児童は教材の中で感動したり、考えていたりしていたのに、急に自己に振り返るように言われても、格差があり過ぎて、概念的なことしか書けなかったり、全く何も書けなかったりすることが多くあります。感動・畏敬の念の授業では、無理矢理、自己の振り返りをするような発問をしなくても、この学習を通して感じたことや思ったことを書かせたり、発表させたり、考えさせたりすることでも自己の振り返りにつながるように思っています。

児童の読書感想文を読んでいると、あらすじを書いて、最後に、「この本はとっても面白かったです。」と書いて終わりということがよくあります。しかし、自分が心を打たれた本を読んで感想を書いたときは、「自分はなかなかできないけれど、この本を読んで少しでも挑戦していこうかなと思います。」など、主人公の生き方から自然と自分を見つめ直すことができます。

先日、5年生の国語の授業で、「大造じいさんガン」の初めて読んだ感想を書かせました。

ぼくは、残雪が自分のことよりも、まず、仲間のことを考えていたところに感動しました。ハヤブサが来て、逃げ遅れた一羽の仲間をどんな強い相手だろうと関係なく、守ろうとしていたのが、さすがリーダーだと思ったからです。もし、ぼくが誰かに仕えることになったら、残雪のような人に仕えたいと思ったし、自分もそのようになりたいなとも思いました。(A男)

残雪がすごいと思いました。近くに銃をもっている人がいたり、ハヤブサがいたりするのに、仲間を全力で助けていてすごいなと思いました。ぼくだったら、仲間そっちのけで逃げます。そんな中でも、残雪は正々堂々と戦っていて、さすが頭領だと思いました。(B男)

特にテーマを提示したわけではありませんが、主人公の生き方について考え、自分と照らし合わせながら書いています。



「感動・畏敬の念」は、教材に自然が織りなす美しい風景や人の心の奥深さ、清らかさを描いた文学作品などを用いて、教師の意図する考えに引っ張っていくのではなく、児童の素直な感情を大切にして、教師も一緒に美しいものに感動する心をもって授業をしていくことが大切なのかもしれません。

本日、「感動・畏敬の念」の授業をします。ご指導を受けたことを次号の「道徳ことはじめ」でお伝えできればと思います。「感動・畏敬の念」についてさらに研究できればと思います。

道徳ことはじめ

第23号

小金井市立東小学校 指導教諭 田上由紀子

今回のテーマは、「**1週間に一度、自分をしっかり見つめること**」についてです。



道徳の時間は、分かりきっていることを考えているような気がします。

そうでしょうか？ 人間は分かり切っていることなら、できますか？



道徳科の目標を見てみましょう。

学習指導要領 第3章 特別の教科 道徳 第1 目標

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値について の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、

学習指導要領解説特別の教科道徳編 第1章 第2節の2 道徳性を養うために行う道徳科における学習

道徳的価値とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものである。学校教育においては、これらのうち発達の段階を考慮して、児童一人一人が道徳的価値観を形成する上で必要なものを内容項目として取り上げている。児童が今後、様々な問題場面に出会った際に、その状況に応じて自己の生き方を考え、主体的な判断に基づいて道徳的実践を行うためには、道徳的価値の意義及びその大切さの理解が必要になる。

一つは、内容項目を、人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解することである。二つは、道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解することである。三つは、道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるということを前提として理解することである。道徳的価値が人間らしさを表すものであることに気付き、価値理解と同時に人間理解や他者理解を深めていくようにする。

(P.17、18より)

価値理解	道徳的価値は人間が人間としてよりよく生きる上で大切なことだと理解する
人間理解	道徳的価値は大切だが、なかなか実現できない弱さが人間にはあると理解する
他者理解	道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、人それぞれだということを前提として理解する



「より高い目標を立て、希望と勇気をもち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜くこと」が大切なのは十分、分かっているよ！



やらなきゃいけないのは分かっているけど、疲れるし、動画も見たい。みんなはちゃんとやっているんだろうか。

個人面談のときに、保護者の方からこんなお話をいただきました。

先日の道徳の授業は大変良かったです。家族についての学習で、私たち保護者もよく考えることができました。

子どもに手紙を書くことはそうそうないので、正直、どう書けばいいか迷いました。でも、その中で、自分の子どもに対する思いや家族についての思いをじっくり考えることができました。当たり前と思っていたことが、よくよく考えると当たり前ではないこともたくさんありますね。

子どもにとっても、普段あまり深く考えることなく当たり前に過ごしていることを、週に1時間の道徳の時間にじっくり考えることは、とても大切だと思いました。



私自身、その保護者の方のお話を聞いて、「普段あまり深く考えることなく当たり前に過ごしていることを週1時間の道徳の時間にじっくり考えることはとても大切だ」ということをあらためて実感しました。

自分自身もこの冬休みに自分の生き方についてじっくり考える機会を得ました。普段は、忙しさに振り回されて、自分自身を振り返ることなく過ごしています。しかし、その忙しさから逃れて、本を読んだり、人の話にじっくりと耳を傾けたりする中で、自分自身を見つめることができました。普段は、「これでいい。」と思っていたことが、「そうではないんだな。」と気づき、自分のこれからの生き方について考えを深めることができました。

週に1時間の道徳が子どもたちの「自分を見つめる」時間になり、今までより少しだけ自己の生き方についての考えを深めることができるようになると思います。

道徳が特別の教科になり、先生方が一生懸命に道徳に取り組んでいる姿が多く見られるようになりました。しかし、取り組みの目的が「評価」しやすい、「評価」するための授業になっていることも否めません。道徳の時間の意義を確かめ、子どもが自己の生き方についての考えを深める学習ができるように、教師自身も自己を見つめる授業になるといいなと思います。



道徳ことはじめ

第24号

小金井市立東小学校 指導教諭 田上由紀子

今回のテーマは、「**道徳科学習指導案の作り方**」についてです。



道徳授業地区公開講座の指導案を作るとき、すごく困ってしまいます。

指導案がしっかりできれば、もちろん授業もよい授業に近づきます！



元都小道会長後藤忠先生が、「道徳科学習指導案作成（超）×3 入門」を作られて、後藤忠先生のホームページ（後藤忠の心を育てる道徳科授業）にアップされています。

ここでは、「道徳科学習指導案作成（超）×3 入門」から抜粋しながら、学習指導案の作りを紹介させていただきます。詳しくは、後藤先生のホームページをぜひ、見てください！

【手順】

- ①「主題名」と「本時のねらい」を立てる
- ②「主題設定の理由」（価値観・児童観・教材観）を考える
- ③展開前段の発問（教材分析から）を考える
- ④展開前段の発問（的を射た発問）を考える
- ⑤展開後段の発問を考える
- ⑥導入の仕方考える
- ⑦終末を考える
- ⑧評価の仕方について考える
- ⑨指導上の留意点を書く

第5学年 道徳科学習指導案

令和2年1月16日(木)

第5学年1組 32名

指導者 田上由紀子

1. 主題名 正しいことはまっすぐに C[公正、公平、社会正義]
2. 教材名 まっすぐに 東京都道徳教育教材集他
3. 主題設定の理由(授業者の指導観)
(1) ねらいとする価値について
社会正義は、人として行うべき道筋を社会に当てはめた考え方である。
(後略)

◎道徳科の「主題」とは、授業者が何を授業のねらいとし、そのねらいを達成するためにどんな教材を使い、それをどう活用するか「**まとめ**」を示すもの

- ①具体的でドンピシャな主題名を付ける
- ②「本時のねらい」を鮮明に立てる
 - ・主題に即して具体的なねらいを立てる
 - ・ねらいの語尾をよく吟味する

授業者は指導観を明確にもって授業を行うこと(重要)

(1)ねらいとする道徳的価値についてには

○本時で指導する「道徳的価値」とは一体 何か？

○この価値は人間がよりよく生きる上で、どんな意味や意義があるのか？

○この価値はどうしたら身に付き実現する のか？ についての授業者の考え（価値観）を書く。

* 思索の際は「解説」第3章第2節(1) 内容項目の概要を手掛かりに行うこと

2) 児童の実態について

気持ちが優しい児童が多い。正しくない行動をとってしまった(後略)

(3) 教材について

本教材は、絵本「しらんぷり」の一部と、(後略)

よい教材を選ぶ、これが一番大事！
教材観を熱く語ろう！

4. 教材分析図

場面の要約	主人公の心の動き (内面)	発 問
①図書室で「しらんぷり」という本を見つけた。	・どんな本なのかな。 ・おもしろい題名だな。	
②本の中で、「芸術のバクハツだ。」とヤラガセたちがドンチャンをいじめている場面を読んだ時。	・ひろし君の状況と似ているなあ。 ・ひどいことをするな。 ・そんなことをして、先生に見つからないのかな。	

後略

的を射た発問を構成するには教材分析が不可欠！

- ①登場人物を一人に絞る ②場面分けをできるだけ細かく行う
- ③各場面の主人公の内面（気持ち、思い、考えなど）を全て書き出す

6. 指導の工夫 (省略)

7. 本時

(1) ねらい

記事を読んで心が決まったぼくが学校へ向かった時の気持ちの変化を考えることを通して、自分が不利な立場になろうとも、正しいことをまっすぐに行っていこうとする心情を育てる。

(2) 学習指導過程

	□学習の流れ ○発問 ・予想する児童の活動	・留意点 ☆指導の工夫 ◆評価
導 入	価値への導入 ○友達や周りの雰囲気流されて、友達をへんな目で見たり、差別し	「主題」に基づいた導入を構想する！「価値への導入」を基本とする！ 抽象思考に子供を引き込まない！
展 開	「まっすぐに」を視聴して、話合う。 ① みんなのいじりがエスカレートして、ひろし君の表情が変わっていくのを、ぼくは、どんな思いで見っていたのでしょうか。 ・頑張りたいという強い気持ち。何か言われるかもしれないけれ 後略	☆実物投影機を使い、絵本のところは絵本を見せながら範読をする。新聞記事は、黒板に貼り、提示しながら範読をする。
	自分を振り返る ○ 友達や周りの雰囲気流されずに、正しいことをすることは簡単なことですか。	
終 末	先生の説話を聞く。	

道徳科授業は児童の短所を是正し、欠点を改善するために行うものではない

児童の実態把握、5つの留意点

- ①児童の実態を児童の「内面形成」と「行動傾向」の両面から把握
- ②児童の今できていることの「よさ」を具体的に認め更なる可能性を探り示す
- ③本時の指導内容に関連して行った教育活動を具体的に記載する
- ④本時の指導内容とは関係のない一般的な実態は記載不要
- ⑤児童の実態に基づき 本時でさらに深めたい指導の重点を明記

「本時のねらい」を鮮明に立てる

本時のねらいは「授業の出口」を示すものです。つまり、授業終了時に児童が到達しているゴール地点を示すものです。したがって、ねらいが漠然としていて曖昧だと授業がぶれます。

的を射たシャープな「発問」を作ろう！

- ①まず、中心発問場面を一つ決める
- ②本時のねらいを吟味し、具体的に
- ③基本発問場面を二つ決める
- ④三つの発問を具体的に作る



道徳ことはじめ

第25号

小金井市立東小学校 指導教諭 田上由紀子

今回のテーマは、「**道徳科の授業**」についてです。



正直に言って、道徳の授業は難しくて、苦痛です・・・。

まずは、理解を変えてみませんか？



どう・・・どうしていいかわからない。
と・・・とても準備が大変。
く・・・苦痛。



どう・・・どうどう(堂々)と自分を語る。
と・・・(子供と)共に考える。
く・・・工夫ができる。

「道徳はどうやってやればいいかわからない」「当たり前のことを教えているだけの様な気がする」などの声がよく聞かれます。

まず、道徳科の特質が何であるかを明確に理解することが大切です。

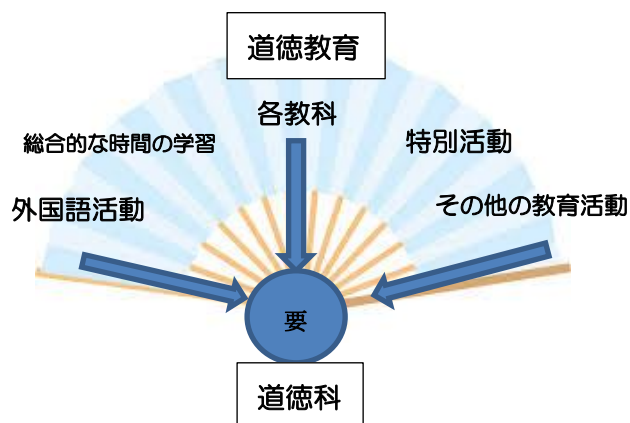
【小学校学習指導要領 解説 特別の教科 道徳編】

(「第3章 特別の教科 道徳」の「第1 目標」)

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

解説の中には、以下のようなことが書かれています。

- ・道徳科が学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要としての役割を果たすこと
- ・道徳科は、このように道徳科以外における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補ったり、深めたり、相互の関連を考えて発展させ、統合させたりすることで、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性を養うことが目標として挙げられている。



道徳性とは・・・人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳的行為を主体的に実践するための内面的な資質・能力のことを指します。

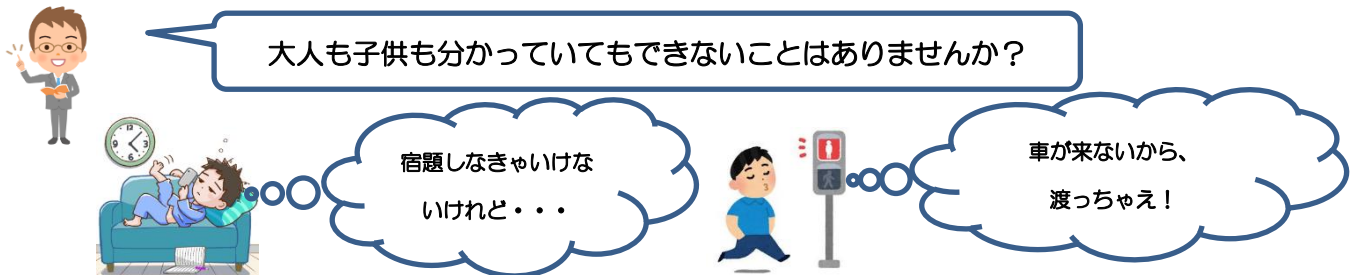
この矢印の方向が重要です。「道徳をしたって何も変わらない。」と感じている先生は、矢印の方向を逆に捉えているかもしれません。

道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものです。要である道徳科では、学校の教育活動全体で行っている道徳教育を深めたり、発展させたり、統合させたりする時間です。「運動会があるから、友情・信頼の授業をしよう。」とつい思いがちですが、これは矢印が逆になっています。教師の下心であり、うまくいかないと「道徳で勉強しただろう!」と言ってしまふことがあります。これは、「行為・行動を目指していて道徳科の目指しているものではありません。

児童が今後、様々な問題場面に出会った際に、その状況に応じて自己の生き方を考え、主体的な判断に基づいて道徳的実践を行うためには、道徳的価値の意義及びその大切さの理解が必要になる。

一つは、①内容項目を、人間としてよりよく生きる上で大切なことであると理解することである。二つは、②道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなども理解することである。三つは、③道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方は一つではない、多様であるということを前提として理解することである。道徳的価値が人間らしさを表すものであることに気付き、価値理解と同時に人間理解や他者理解を深めていくよう。にする

下線①が価値理解、下線②が人間理解、下線③が他者理解となります。



分かっていてもできないのが人間です。そのことを自分の経験や考え方、感じ方をもとにして道徳科の時間にみんなで話し合って考えます。先生自身が、人間の弱さなどの自分の経験を振り返って子どもの前で堂々と語ることで、「先生でも、そうなんだ…」などと児童はさらに深く考えることができます。

道徳科の時間に、「内容項目の価値について教えなくては…」という思いで授業をすれば、「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」に書かれてあるように、特定の価値観を児童に押し付けたり、主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導したりすることになり、道徳科の目指すものとはなりません。児童と共にその時間に学習する内容項目（価値）を教師が考えることで、児童は、よりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続けることができます。「児童と共に考える」という視点になると、児童のいろいろな考えを聞くのが楽しくなってきます。「この子は、こんな風に考えるんだ。」「なるほど、そういう考えがあるのか。」など、教師が児童から教えられることがたくさんあります。

「道徳科では、場面絵を用意するなど準備が大変で…」という声もよく聞きます。その通りです。なので、場面絵など作成したものは、蓄積しておくことが大切です。厚紙(工作用紙)などでファイルを作り、その中に入れて毎年使えるようにすることをお勧めします。作ったファイルは、学年ごと箱などに入れておきます。

教材名
内容項目
作成者

準備が大変にはなりますが、道徳の授業は工夫次第で子供の反応が違います。教師の説話は終末と思いがちですが、導入にもってこくことも可能です。身近な先生の話をもとに聞くことで、児童は自分自身のことを振り返りながら、その時間の主題について考えをもつことができます。

道徳科では、教材の精選と教材提示で授業が左右されます。ここがいい加減になると、教材が児童の心に響くことなく、ただの「読み取り道徳」になってしまいます。教材が児童の心に響くことで、児童は自然に自分の心を重ね合わせて、自分を見つめることができます。教材提示を工夫することを考えることも大切です。



よい授業をすれば、評価したいことがたくさん出てきます。

あゆみや要録に評価が入ったことで、悩んでいらっしゃる先生方が多いようです。道徳の評価は、昔からあります。「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」には、評価について下記のようにあります。

児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

振り返りなどで児童がねらいに合っていないのであれば、指導が的確であったか、そこをまず考える必要があります。教師と児童が納得いく授業ができれば、児童の習状況や道徳性に係る成長をあゆみ(通知表)や要録に書きたいという気持ちになります。ふだん当たり前と思っている内容項目（価値）について、1週間に1度、児童と共にじっくりと考えることは、とても貴重な時間だと考えています。